

大犯三箇条の成立について

On the formation of “Tai-Bonn-Sannkajou”

下 沢 敦

Atsushi SHIMOZAWA

要約

初期の室町幕府が自ら発した法令の中で使用していた大犯三箇条の語は、大番催促・謀叛・殺害人の合計三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項全三箇条を表す一個独立の法令用語であったと考えられる。しかし、鎌倉時代の守護の職権事項全三箇条の全てを重大な犯罪行為の意味を持つ大犯の語によって矛盾なく統一的に捉えるのは、困難である。小稿では、既に鎌倉時代前期に謀叛・殺害の二種類の犯罪行為を犯過として一括りに捉える見方が存在していた事実に着目し、それを拠り所として、大番催促・謀叛・殺害人の合計三項目から成る大犯三箇条を大番催促・犯過人三箇条として捉え返した。その上で、大犯三箇条の中の大犯の語を分解し、大を大番催促の冒頭の一字を取った略号、犯を犯過人の冒頭の一字を取った略号と見て、大犯の語をそれらの略号の連記として捉え直し、結局、大犯三箇条とは、大番催促・犯過人三箇条の表現を短縮した単なる便宜上の略称に過ぎなかったと結論した。更に、単なる便宜上の略称としての大犯三箇条の語は、少なくとも大番催促が廃絶された南北朝時代以後には成立し得ないことをも推定した。

キーワード：鎌倉型大犯三箇条

目次

- I 始めに
- II 御成敗式目第三条の中の大犯三箇条規定
- III 鎌倉時代前期の資料に見る守護の職権事項
- IV 大犯三箇条の成り立ち
- V 南北朝時代における大犯三箇条の内容変化
- VI 終わりに

I 始めに

現在までに活字化されている残存資料に徴して知り得る限りでは、中世の武家政権が自ら発する法令の中で「大犯三ヶ条」または「大犯三箇条」という語を鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を限定して表す一個独立の熟した法令用語として殊更意識的に使用し始めたのは、実は、当時の鎌倉幕府ではなく、次の時代の室町幕府の方であったと言わなければならない。室町幕府が自ら発した法令の中で大犯三ヶ条または大犯三箇条の語を使用していた実例を挙げると、例えば、建武五年（1338年）後七月廿九日に室町幕府が決定した「諸國守護人事」の中で「固守貞永式目、大犯三ヶ條之外、不可相締」と述べている事例⁽¹⁾、或いは、貞和二年（1346年）十二月十三日に室町幕府が決定したと考えられる「同守護人非法條々」の冒頭の第一条で「大犯三箇條【付、苅田狼藉、使節遵行】外、相締所務以下、成地頭御家人煩事」と述べている事例⁽²⁾などの使用実例を挙げ得る。これらの室町幕府法令は、室町幕府が発した法令としては、ごく初期（南北朝時代）に属するが、これらの法令の中では、室町幕府は、鎌倉幕府が貞永元年（1232年）に制定した貞永式目（御成敗式目）第三条の「諸國守護人奉行事」の中に置かれていた合計三箇条から成る鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を限定して表す規定を名付けて、大犯三ヶ条または大犯三箇条と呼んでいたようである。また、南北朝時代後期に成立した軍記物の代表作として著名な『太平記』の中でも、例えば、卷第三十三「公家武家榮枯易地事」の中には、「前代相摸守ノ天下ヲ成敗セシ時、諸國ノ守護、大犯三箇條ノ檢斷ノ外ハ締フ事無リシニ」云々との記述が見られ⁽³⁾、大犯三箇条の語は、ここでも、やはり前代（鎌倉時代）の守護の職権事項の範囲を限定して表す一個の法令用語として用いられていると考えられる。これらの資料の存在から推して、大犯三ヶ条または大犯三箇条の語が一個の法令用語として成立したのは、室町時代の初期の南北朝時代においてではなかったかと推定することも、一応可能であるとは言えよう。

しかし、初期の室町幕府が自ら発した法令の中で意識的に使用していた大犯三ヶ条または大犯三箇条と言う一個独立の熟した法令用語の中に見えている「大犯」という語の語義

について、大犯と言う語から通常連想されるような「重大な犯罪行為」の意味で大犯の語を解釈することに対しては、筆者は、従来永らく、少なからず疑問を抱いて来た。何故かと言えば、御成敗式目第三条の「諸國守護人奉行事」の中に置かれていた鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を限定して表す規定に照らして見ると、室町幕府が自ら発する法令の中で同条の規定を言い表そうとする時に意識的に使用していた大犯三ヶ条または大犯三箇条と言う呼称の中に出て来る大犯の語を重大な犯罪行為の意味で捉え、尚且つ矛盾を来たさないようにするのは、至難の業ではないかと思われるからである。この点については、次節で改めてもう少し詳しく述べることにする。

小稿では、筆者は、主に室町幕府が使用していた大犯三ヶ条または大犯三箇条と言う一個独立の法令用語の中に見える大犯と言う語の語義如何の問題並びに大犯三箇条と言う一個独立の法令用語が如何にして成り立って来たのかと言う成立の経緯の問題について、若干の考察を試みたいと考える。なお、小稿では、煩雑を避けるために、次節以後では、大犯三ヶ条及び大犯三箇条の表記を大犯三箇条に統一し、貞永式目及び御成敗式目の表記を御成敗式目に統一して、議論を進めて行くことにする。

Ⅱ 御成敗式目第三条の中の大犯三箇条規定

初期の室町幕府が自ら発した法令の中で大犯三箇条と呼び表していた御成敗式目第三条の「諸國守護人奉行事」の中に置かれていた鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を限定して表した規定とは、大体次に掲げるような規定である。

一 諸國守護人奉行事

右大將家御時所被定置者大番催促謀叛殺害人【付夜討強盜山賊海賊】等事也而近年分補代官於郡郷充課公事於庄保非國司而妨國務非地頭而貪地利所行之企甚以無道也抑雖爲重代之御家人無當時之所帶者不能駢催兼又所々下司庄官以下假其名於御家人對捍國司領家之下知云云如然之輩可勤守護役之由縱雖望申一切不可加催早任右大將家御時之例大番役并謀叛殺害之外可令停止守護之沙汰若背此式目相交自餘事者或依國司領家之訴訟或依地頭土民之愁鬱非法之至爲顯然者被改所帶之職可補穩便之輩也又至代官者可定一人也⁽⁴⁾

この諸國守護人奉行事の本文の冒頭部分では、鎌倉幕府初代將軍源頼朝の時代に鎌倉幕府が守護の職権事項を「大番催促」、「謀叛」、「殺害人」の合計三項目から成る三箇条の範囲に限定して定め置いたことを述べてある。源頼朝の時代に定立された大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る守護の職権事項の範囲が合計して丁度三箇条になり、三箇条より多くもならなければ、三箇条より少なくもならないということは、御成敗式目の制定当時の鎌倉幕府の側で明確に認識していたところであった。その点を立証するに足る恰好の同時代資料としては、御成敗式目の制定の前年に当たる寛喜三年（1231年）五月

十三日に鎌倉幕府が決定した「諸國守護人奉行事」と言う御成敗式目第三条と全く同じ表題を持つ鎌倉幕府の追加法令を挙げることができる。御成敗式目の制定より一年以上前に鎌倉幕府から発されていた諸國守護人奉行事の規定を引用すれば、大体次の通りである。

一 諸國守護人奉行事、大番催促、謀叛、殺害人之外、不可管領細々雜事等之由、故右大將家御時、被定置畢、而近年以少事偏煩所部云々、太無其謂、庄家地頭、公領檢非違所、可致何沙汰哉、然則守護人者、三箇條之外、不可致過分之沙汰、地頭檢非違所廻寛宥之計、可專乃貢勤之由、面々被遣御教書、自今以後、若有違亂之輩者、就領家預所住民等之訴訟、尋決兩方、可被注申、罪科無所遁者、可令改補所職之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

寛喜三年五月十三日

武藏守 判

相模守 判⁽⁵⁾

この鎌倉幕府追加法令の本文冒頭の箇所では、御成敗式目第三条の本文の冒頭部分とほぼ同様に、源頼朝の時代に大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項が定められたことが述べてあり、本文中程の箇所では、それらの三項目が明確に「三箇條」と言い換えられている。ここで三箇條と呼び表されている合計三項目の事項が大番催促、謀叛、殺害人の三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項を指していることは、全くと言ってよい程明白である。そうすると、後代の南北朝時代に至り、初期の室町幕府が自ら発する法令の中で御成敗式目第三条の中の守護の職権事項の規定を言い表す時に意識的に使用していた大犯三箇條と言う一個独立の法令用語は、これらの大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る全三箇條の事項を指していたと考えるのが至当であると言うことになる。しかし、そうすると、当然の如くにして、次のような疑問が生じて来ることにならざるを得ない。即ち、明らかに中世の当時から重大な犯罪行為として捉えられていたと思われる謀叛、殺害人の二項目はともかくとして、およそ犯罪行為とは看做し難いと思われる大番催促と言う一項目が一体何故に大犯三箇條に属することになるのかと言う単純極まる疑問が自ずと頭を擡げて来るのである。初期の室町幕府が自ら発する法令の中で使っていた大犯三箇條の語は、大番催促の一項目も含めなければ、到底成り立ち得なくなってしまうのではないと思われる。前節で一言触れた筆者が年来少なからず抱いて来た単純な疑問と言うのは、正にこの点についての疑問に他ならない。そこで、小稿では、差し当たり、初期の室町幕府が自ら発する法令の中で御成敗式目第三条の中の鎌倉時代の守護の職権事項に関する規定を大犯三箇條と呼び表していた場合に限って取り上げて行く方針を採用することにするが、そうすると、その場合、大犯三箇條と言う一個の法令用語の中に現れる大犯と言う語は、実は、大犯と言う語から通常連想されるような重大な犯罪行為と言う意味合いを全く持っていないのではないかと考えなければならなくなってくるであろう。

しかし、改めて指摘するまでもなく、当然至極のことであるには違いないが、大犯と言う語それ自体は、既に鎌倉時代から、重大な犯罪行為と言う意味を持つ一個独立の熟語として立派に成り立っていたのであり、当時作成された文書の上で実際にその意味で使用されていた事例が間々見受けられるのである。この重大な犯罪行為と言う意味での大犯の語の使用例としては、特に元寇直後の鎌倉時代後期に属する弘安五年（1282年）十月に東大寺衆徒等が作成した次に掲げる文書資料がかなりよく知られている事例であると言えよう。

東大寺衆徒等誠惶誠恐謹言

請殊蒙天裁、因准先例、任注進交名、不日可召取由、被仰下武家、當寺領伊賀國黒田庄住人清定康直以下輩、山賊、夜罰、強盜、放火、殺害等惡行露顯上、敵對本所、切塞路次、引逆木、構城墪上、於狼藉重疊罪科難遁子細狀、

一通 六波羅家狀案【當國中惡黨人可召取由事】（中略）

右、謹檢案内、諸國山賊以下夜罰強盜等之大犯者、皆是武家成敗之限也、隨而如弘安三年二月三日六波羅家狀者、可召取國中惡黨云々、全無被除本所一圓地之所見、平均可有沙汰之條、無子細歟、（中略）望請 天裁、任申請被仰下者、匪營令斷絕寺領一庄之惡行、兼國中惡黨削名字者歟、仍不堪鬱訴、衆徒等誠惶誠恐謹言、

弘安五年十月 日

東大寺衆徒等上⁽⁶⁾

この文書を一見すると、本文中に出ている大犯とは、本文冒頭の箇所に例示されている「山賊以下夜罰強盜等」の重大な犯罪行為を意味する語として解釈する以外になさそうに思える。しかし、この文書の冒頭の表題中に列举されている悪行の種類は、「山賊、夜罰、強盜、放火、殺害等」と合計して五種類に上り、これらの悪行の全てが重大な犯罪行為と言う意味での大犯に属していたとすれば、この意味での大犯は、決して三種類だけには止まらなかったことになる。即ち、この場合、大犯三箇条が成り立たなくなるのである。また、これと同じく重大な犯罪行為と言う意味での大犯の語が使用されていた事例としては、やはり鎌倉時代後期に属する乾元元年（1302年）十二月十四日に作成された「紀伊神野莊公文【平義信】起請文」の中の「一 致生等大犯可停止事」の事例⁽⁷⁾を挙げることとできよう。この事例の場合は、事書の割注の中に「強盜 竊盜 山賊 海賊 夜打 放火」と合計六種類の犯罪行為が列举されている。恐らく、これらの六種類の犯罪行為も、事書に出ている殺生と並ぶ重大な犯罪行為即ち大犯として割注に付記されたのであろう。しかし、そう考えると、やはりこの場合も、重大な犯罪行為と言う意味での大犯は、決して三種類だけには止まらなかったことになってしまう。即ち、この場合にも、大犯三箇条が成り立たなくなるのである。これらの資料に照らして考えると、鎌倉時代には、大犯と言う一個独立の熟語を使って重大な犯罪行為と言う特定の意味を表そうとする場合、その意味での大犯の種類は、決して三種類だけに限定されることがなかったと断言し得る

のである。そこで、重大な犯罪行為の意味を持つ大犯の語を使用する場合には、大犯三箇条と言う一個独立の法令用語がおよそ成り立たなくなってしまうと言う頗る困難な結果を来たことになる訳である。しかし、それでは、その次の南北朝時代に初期の室町幕府が自ら発した法令の中で意識的に使用していた大犯三箇条と言う一個独立の法令用語の中に出来来る大犯と言う語は、一体何を意味していたのであろうか。

Ⅲ 鎌倉時代前期の資料に見る守護の職権事項

ここで、鎌倉時代の守護の職権事項の範囲に関して、同時代の資料に即して少しだけ見ておこうと考えるが、本節では、特に鎌倉時代の初期から中期にかけての時期即ち御成敗式目が制定されるまでの鎌倉時代前期を中心にして、関連資料を数点だけ年代順に挙げて紹介し、ごく簡単に説明を加えて行くことにする。

鎌倉時代の守護の職権事項の範囲に言及している同時代の資料の中でも、かなり早い時期に属する事例としては、例えば、十二世紀最末期に当たる正治元年（1199年）十二月廿九日付けの『吾妻鏡』の記事を挙げ得る。『吾妻鏡』同日条を引用すると、大体次の通りである。

○廿九日丁亥。以小山左衛門尉朝政。補播磨国守護職畢。住國家人等相從朝政。勤仕内裏大番。惣可致忠節也。朝政可沙汰変者。謀反殺害人変許也。相交國務。不可成敗人民訴訟。凡觸変不可煩國中住人之旨。被仰含云々。⁽⁸⁾

この『吾妻鏡』の記事では、鎌倉幕府が播磨国の守護に任命した小山朝政の職掌について述べてあるが、鎌倉幕府は、播磨国守護小山朝政の職権事項を住国の御家人を率いて実施する内裏大番役の勤仕及び謀反、殺害人の事件を沙汰すべきことの合計三項目の事項だけに限定している。そして、守護小山朝政がそれらの三項目に限定された事項以外の國務や人民の訴訟などと言った全く関係のない別の事項にまで関与を及ぼして行くことを一切禁止している。既に十二世紀最末の鎌倉時代初期の段階で、後年初期の室町幕府が大犯三箇条と呼び表した合計三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項が三項目共全部一通り出揃っていることがよく伺える資料であると言えよう。

十三世紀に入ると、承久三年（1221年）には、史上余りにも有名な「承久の乱」が起こったが、大乱の翌年の貞応元年（1222年）四月廿六日には、鎌倉幕府は、「國々守護人并新地頭非法禁制御成敗條々事」の表題を持つ全六箇条から成る鎌倉幕府追加法令を発した。この鎌倉幕府追加法令では、その前半の三箇条が守護に関連する規定の部分成し、その後半の三箇条が地頭に関連する規定の部分成していると考えられるが、今ここでは、前半の守護関連の規定と考えられる三箇条の部分だけを引用する。大体次の通りである。

一 京都大番事

一 謀叛人追討事

糺明眞偽、隨實正、可致沙汰、

一 刃傷殺害人禁斷事

右、先相觸所在之庄公、糺明犯否、任實令搦出之時、可請取之、無左右使者亂入事、可停止、兼又國司一所之中、檢非違所別當爲宗所職也、而守護人令管領之間、云盜犯放火、云人勾引、如此犯人不及成敗云々、早停止守護人之妨、任先例、可爲檢非違所之沙汰、⁽⁹⁾

引用部分の事書の三箇条を見ると、「京都大番事」、「謀叛人追討事」、「刃傷殺害人禁斷事」の三項目から成っていて、第三条の殺害人の禁断のことに刃傷行為が付け加わり、刃傷殺害人の禁断のことになっている点を除けば、後年初期の室町幕府から大犯三箇条と呼ばれた全三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項の全てがこの鎌倉幕府追加法令の中で漏れなく規定されていることを確認できる。その上、第三条の刃傷殺害人禁断事の事書の次に置かれた規定部分を見ると、鎌倉時代の守護が事書の上に明示されている刃傷、殺害などの特定の犯罪行為以外の盗犯、放火、人勾引などと言った他の種類の犯罪行為の犯人の成敗に關与することを鎌倉幕府から禁止されたことも分かる。

また、同年五月十日付けの「關東下知狀案」では、次のように記されている。

播磨國瀧野高島庄、故右大臣殿御時建曆二年被止守護所使入部畢、任其狀、内裏大番役并致害人沙汰之外、不可入部使者之狀、依仰下知如件、

貞應元年五月十日

陸奥守平在判⁽¹⁰⁾

この鎌倉幕府発令文書では、「内裏大番役」と「致害人沙汰」の二項目だけしか挙がっていないが、このことは、建曆二年（1212年）に鎌倉幕府第三代将軍源実朝が播磨国の瀧野高島庄に同国守護所の使者が入部することを原則的に禁止した際に同庄に限って特別に定めた特例的な措置として理解することが可能であろう。本文の文面から見て、内裏大番役並びに殺害人の沙汰の何れの項目も、播磨国守護所の使者が同庄に入部して執行することを認められた職務の内容を成していることが明白であるから、これらの二項目の事項は、何れも、鎌倉時代の播磨国守護の職権事項の内容に一部合致していたと理解して差し支えないと思われる。

また、翌貞応二年（1223年）八月六日付けの「關東下知狀」では、次のような文面になっている。

可令早停止爲伊賀國守護使亂入當國長田庄事

右、當庄、前々守護之時、不入部使者之由、地頭所申也、大番役并謀叛致害沙汰之外、不可入部彼使之狀、依仰下知如件、

貞應二年八月六日

前陸奥守平（花押）⁽¹¹⁾

この鎌倉幕府発令文書では、伊賀国守護の使者が同国長田庄に入部して執行することを認められた職務の内容として、「大番役」、「謀叛」、「致害沙汰」の三項目が挙がっており、守護の使者が執行し得る職務の範囲がこれらの大番役、謀叛、殺害の沙汰の三項目の事項だけに限定されていたことが明瞭に分かる。この伊賀国守護使の職務範囲は、取りも直さず、同時に、鎌倉時代の伊賀国守護の職権事項の範囲を大番役、謀叛、殺害の沙汰の三項目に限定して明確に表すと言う役割をも果たしていたと考えて、一向に差し支えは生じないであろう。

それから、安貞二年（1228年）六月四日付けの「但馬守護昌明請文案」の中に二つ出ている一つ書きの内、最初の方の一つ書きの本文中では、「如去年壬三月十七日鎌倉殿御教書狀云、大番催促・謀叛・殺害事者、可爲守護沙汰之由、故大將家御時被定下諸國候了云々」と記されている。⁽¹²⁾ ここでも、鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を大番催促、謀叛、殺害のことの三項目の事項の範囲に限定して明示してあるが、文末に源頼朝の時代にそれらの三項目が守護の職権事項であるべき由を諸国に通達したと記されている点も、見落とせない重要な記述ではないかと思われる。

翌寛喜元年（1229年）四月十日付けの「關東下知狀」では、次のように記されている。

可早停止守護所使入部丹波國上林庄事

右、任度々下知狀、停止彼使入部、謀反殺害輩出來之時者、爲庄家之沙汰、可召渡守護所之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

寛喜元年四月十日

武藏守平（花押）

相模守平（花押）⁽¹³⁾

この鎌倉幕府発令文書では、鎌倉殿からの指令により、丹波国守護所の使者の同国上林庄への入部を原則的に禁止し、謀反、殺害の輩が現れた場合には、庄家の沙汰として守護所へ犯人の身柄を召し渡すべきことが命じられている。上掲の数点の鎌倉幕府発令文書の場合とほぼ同様に考えて、この文書の記載からは、少なくとも謀反、殺害の沙汰が鎌倉時代の丹波国守護の職権事項に属していたことを無理なく推断し得るであろう。

更に、同年十一月六日付けの「關東御教書案」の本文中には、「守護成敗事、關東御下知三ヶ條之外、非沙汰之限歟」との一節がある⁽¹⁴⁾が、特に「三ヶ條」と言い表わされている点に着目して、「關東御下知三ヶ條」と記されている部分を上述の大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項を指している部分と解釈すれば、それらの合計三箇条から成る事項が「守護成敗事」に相当するということについては、全く容易に得心が行くと言うことができるのである。

以上、鎌倉時代の初期から中期にかけての時期、特に御成敗式目の制定以前の鎌倉時代

前期に限定して、鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を限定する内容を持つ文書資料を幾つか挙げて紹介したが、鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を大番催促、謀叛、殺害人と言う特定の三項目の範囲に限定して表した御成敗式目第三条の規定の原型に相当する規定に関する記載が御成敗式目の制定以前の当時既に見受けられる場合が間々あったと言うことを伺い得たのではないかと思う。本節で紹介した数点の資料の記述を総合して、結論的に述べれば、鎌倉幕府初代将軍源頼朝の幕府草創期以来、鎌倉時代の守護の職権事項の範囲は、大番催促（大番役）、謀叛（謀叛人）、殺害（殺害人）の合計三項目から成る特定の事項の範囲内に厳密に限定され、合計三項目で丁度三箇条になる特定の事項だけに固定されていて、守護がそれらの合計三項目の特定の事項以外の別の事項にまで濫りに関与を及ぼして行くことは、厳重に禁止されていたと考えられる。そこで、合計しても三項目に満たないような例外的な事例が間々存在したことは、確かに否定できないとしても、守護の職権行使がそれらの合計三項目の特定の事項の範囲の外に恣意的に超え出て行ってしまうと言うようなことは、恐らくは、既に鎌倉幕府創設の当初から厳に戒められ、原則的に認められてはいなかったと考えることができるのである。

IV 大犯三箇条の成り立ち

前節までに見て来たように、既に鎌倉時代には、大犯と言う一個独立の熟語は、大犯と言う語から通常連想されるような重大な犯罪行為の意味で、種々の文書の中で使用されるようになっていたが、その場合、大犯の語は、決して三種類の特定の犯罪行為についてだけ当て嵌まっていた訳ではなかった。即ち、文書中で重大な犯罪行為の意味での大犯の語を使用する場合、大犯は、場合によって、五箇条になったり、七箇条になったりしていたので、大犯三箇条は、なかなか成り立って来なかったのである。一方、鎌倉時代の守護の職権事項は、源頼朝による鎌倉幕府の草創期以来、大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る丁度三箇条の特定の事項だけに厳密に限定されていた。従って、初期の室町幕府が発した法令の中で鎌倉時代の守護の職権事項を言い表すのに用いられていた大犯三箇条と言う一個独立の法令用語の中に出て来る大犯と言う語を通常その語から連想されるような重大な犯罪行為として捉えるのは、到底適切妥当な解釈とは言い難いと言うことになる。繰り返しになるが、しかし、それでは、室町幕府が使用した大犯三箇条と言う一個独立の法令用語の中に出て来る大犯と言う語を一体どのように捉えるのが適切妥当な把握の仕方と言うことになるのであろうか。

御成敗式目の制定から十年近く後の時期に属するが、『吾妻鏡』仁治元年（1240年）六月十一日条には、次のような記述が出ている。

○十一日甲辰。於前武弼御亭有臨時評議定三ヶ條矣。

一新補地頭得分田畠加徴吏

於本年貢一斗所者。可爲參分一者。

一簣屋用途勤仕所々犯過吏

於謀反殺害者。可召渡守護所。自餘吏者。不可有沙汰者。

一山僧補代官吏

地頭所【山門領非制限。】者。可停止之。但離山之後經年序者。非沙汰之限者。(後略)⁽¹⁵⁾

この「三ヶ條」の中で、特に第二条に注目すると、事書の中で「犯過」と言い表してある犯罪行為を本文中で「謀反殺害」と呼び換えてあることが分かる。但し、勿論、ここで犯過と言われている犯罪行為の意味が鎌倉時代の守護の職権事項全三箇条の内の二項目を成していた謀反、殺害の二種類の特定の犯罪行為の意味だけに狭く限定されていたなどとは、到底言い難いには違いないが、『吾妻鏡』のこの記事を見ると、何れも鎌倉時代の守護の職権事項に属する謀反、殺害の二種類の犯罪行為類型を犯過と名付けられる犯罪行為概念の範疇に属させると言うことが当時実際に行われていたことを明瞭に知り得るのである。そうすると、鎌倉時代には、法令等の文書の作成の際や、或いは、文意の解釈の上で、この事例のように、犯過を謀反、殺害と呼び換えるとか、或いは、逆に謀反、殺害の二種類の犯罪行為をまとめて、便宜上犯過と言う一語で簡単に呼び換えるなどと言うような語の置換の操作を施すことは、実際によく行われていたことではなかったかと推測されて来るのである。

このような語の置換の操作を行うと言う点に関連しては、仁治年間より三十年余も以前に遡るが、承元三年（1209年）十二月六日付けの「關東御教書案」の中にも、ほぼ同様の事例が存在する。この鎌倉幕府発令文書の末尾の箇所には、「一 宇佐宮領犯過人事、可停止守護使締之由、嚴旨分明也」と書かれた一箇条が置かれ、その本文中では、「且神領内犯過人者、爲宮檢斷可沙汰之、令糾彈輕重、於謀叛殺害人者、可被召渡守護所、至其外罪科者、一向可爲宮司計条、任右大將家例、被仰資頼畢」と記されている。⁽¹⁶⁾ 見出しの一つ書きの内容や本文の記述内容が上掲の『吾妻鏡』仁治元年六月十一日条の記事に出ている三箇条の規定の内の第二条とほぼ同じく守護の職権事項の範囲を限定して表す内容になっているところから考えて、この文書の中に出て来る「犯過人」の語の範疇の中に「謀叛殺害人」を含める解釈を施したとしても、妥当性を欠く恣意的な解釈とは決して言えないと考えられる。従ってまた、逆に謀叛、殺害人をまとめて、便宜上犯過人の一語で簡単に呼び換えることによって、鎌倉時代の守護の職権事項の内の二項目を占める二種類の犯罪行為者を便宜上犯過人の一語にまとめて言い表そうとしたとしても、そのような実用的な便宜上の語の置換の操作からは、それ程大きな誤解が生じて来ることは、先ずなかったのではないと思われる。

この実用的な便宜上の語の置換の操作の点に関連して、特に重要な資料を提供している

と思われるのが、貞応二年三月付けの「播磨守護所藤原某安堵状寫」である。ここに引用すれば、大体次の通りである。

可致早任先例、沙汰播磨國半郡廳直職名田畠以下所職等事、

補任中原如意丸

右、件職者、如意丸相傳之所帶也、仍關東御下文并代々守護下知之狀帶之云々、早大番以下御公事并犯過人等事、任先例可令致沙汰之狀如件、

貞應二年三月 日

守護所左衛門少尉藤原朝臣（花押影）⁽¹⁷⁾

鎌倉時代の守護の職権事項について言及している記述箇所と言う観点からして、この播磨國守護所発給文書の中では、播磨國守護所が「大番以下御公事并犯過人等事」と述べている箇所に特に注目したい。同様の観点から、この引用箇所を前節所引の同年八月六日付けの「關東下知狀」の中の「大番役并謀叛致害沙汰」と述べてある記述箇所⁽¹⁸⁾と照らし合わせて、両者を見比べて見ると、「大番」の語との繋がり具合や前後の位置関係から考えて、この文書の中で「犯過人等事」と述べてある箇所が關東下知狀で「謀叛致害沙汰」と述べてある箇所にほぼ正確に対応する関係にあるらしいということに直ちに気付かされるのである。これらの記述箇所の語の対応関係を看取することは、鎌倉時代の当時における語の置換操作の可能性を考える上で極めて重要な展望をもたらすのではないと思われる。

なお、嘉祿元年（1225年）九月十六日付けの「北條重時書下」では、次のように書かれている。

（花押）

春近領内志久見郷守護所使入部事、被止候了、但謀叛・致害・夜討・強盜・放火・刃傷、如此犯科之輩出來之時者、於其所之堺、可令請取犯人給候、存此旨可沙汰候之由候也、仍執達如件、

嘉祿元年九月十六日

尾藤□□奉

謹上 藤内右衛門尉殿⁽¹⁹⁾

この鎌倉幕府関連文書では、「謀叛・致害・夜討・強盜・放火・刃傷」などの如き「犯科之輩」との表現が見られるが、この記述からは、御成敗式目の制定以前の当時既に謀叛人及び殺害人は、夜討、強盜、放火、刃傷などの他の犯罪行為の犯人と並んで、犯科の輩に属すると考えられ、これらの犯科の輩の身柄の受け取り行為は、守護所の管轄事項に属していたと言うことを間違いなく推定できるであろう。勿論、この文書に犯科として列挙されている犯罪行為は、謀叛、殺害の二種類だけには止まらないが、同時代の守護の職権事項に属する謀叛、殺害の二つの犯罪行為が筆頭に並んで記されていることから考えれ

ば、鎌倉時代前期の当時、守護の職権事項たる謀叛、殺害の二種類の犯罪行為が犯科の代表的な例として捉えられていたことを推察するに十分に足りるものがあると言えよう。

御成敗式目の制定を間に挟んだ鎌倉時代前期から中期にかけての時期における上記諸事例の残存の事実から推測すると、鎌倉時代の文書資料の上に現れる謀叛人及び殺害人の二者をまとめて、犯過人または犯科人の一語で以て呼び換えると言う解釈上の語の置換の操作を加えることは、別段不自然な操作とまでは言えず、それどころか、十分に無理なく成り立ち得る操作の方法になって来るのではないかと思われる。再度煩雑を避けるために、以後、小稿では、犯過人または犯科人を犯過人に統一して論ずることにするが、このような解釈上の語の置換の操作を施すことが十分に可能であるとすれば、鎌倉時代の守護の職権事項としての大番催促、謀叛、殺害人の合計三項目から成る三箇条は、大番催促、犯過人の合計二項目から成る実質上の全三箇条として捉え直すことが十分に可能になって来るであろう。但し、この場合、謀叛、殺害人の二語を犯過人の一語を以て言い表したとしても、犯過人の一語が意味している実質的な内容は、謀叛（人）及び殺害（人）の二項目に他ならないので、それらの二項目が合計三箇条から成る鎌倉時代の守護の職権事項の内の二箇条を占め続けていると言う事実の点は、正に不動であると言って差し支えない。それ故、便宜上謀叛、殺害人の二語をこのように短く犯過人の一語に言い換えると言う語の置換の操作を取って施したとしても、鎌倉時代の守護の職権事項が合計して必ず三項目の特定の事項から成る全三箇条を構成していなければならないと言う源頼朝による鎌倉幕府草創期以来の基本的な要請の点について、実質上何らかの変動を来たすようなことは、全く起こって来ないと言ってよいのである。そこで、上掲の鎌倉時代前期から中期にかけての時期における幾つかの用例に照らして考えれば、後年初期の室町幕府の法令の中で鎌倉時代の守護の職権事項を言い表すのに使用されていた大犯三箇条の語とは、結局のところ、大番催促・犯過人三箇条の謂いに他ならないと考えることが可能になって来るであろう。そう考えてよいとすれば、大犯三箇条として熟した一個独立の法令用語の中に現われる大犯と言う語については、次のように捉えることが可能になって来よう。即ち、大犯の語の中の大の字と犯の字とを分離して大犯を二つに分解し、大の字の方を大番催促と言う語の冒頭の大の字を取って大番催促と言う語を大の一文字に約めた略号として捉え、犯の字の方を犯過人と言う語の冒頭の犯の字を取って犯過人と言う語を犯の一文字に約めた略号として捉えると言う見方が十分に成り立って来ることになるのではあるまいか。即ち、筆者は、所謂大犯三箇条とは、大番催促・犯過人三箇条と言う聊か長過ぎて少々言いにくい表現の中にある大番催促・犯過人の二語から成る表記の部分各語について冒頭の一文字分宛に圧縮し、それらの略号を連記しただけの単なる便宜上の略称に他ならなかったと考えるのである。そして、そのように理解して初めて、意味上本来的に犯罪行為とは全く関わりを持たないと思われる大番催促の一項目が大犯三箇条の中の大犯と言う語の範疇の中に

どうしても含まれなければならない必然性を帯びる理由が判明するのではないかと考えられる。

但し、前述したように、鎌倉時代に作成された文書の中で重大な犯罪行為の意味を持つ大犯の語が大犯三箇条と言う一個独立の法令用語として熟した形ではなく、それ一語だけ単独で独立に使用される事例が往々にして見受けられたのは、紛れもない事実であるから、筆者が述べたような解釈方法を大犯と言う一個独立の熟語の全ての使用例に対して一般化して当て嵌めて行くと言ったようなことは、余りに無謀であり、事実上、到底不可能である。筆者が述べたような大犯の語の解釈方法は、例えば、小稿で筆者が再三繰り返して来たように、初期の室町幕府が自ら発する法令の中で鎌倉時代の守護の職権事項の範囲を言い表すために大犯三箇条の語を使用したと言う場合のように、飽くまでも、大犯と言う語が大犯三箇条として熟した一個独立の法令用語の中に出て来る限りにおいてだけ成り立ち得ると思われる解釈論に過ぎないのであるが、筆者の所期の目的からすれば、その場合に確実に成り立つことが明らかにされるとすれば、それで十分なのである。

V 南北朝時代における大犯三箇条の内容変化

しかし、ここで改めて小稿第Ⅰ節に掲出した『太平記』の記述を見直すと、そこでは、「前代相摸守ノ天下ヲ成敗セシ時、諸國ノ守護、大犯三箇條ノ檢斷ノ外ハ綺フ事無リシニ」云々と記されている。⁽²⁰⁾ この「大犯三箇條ノ檢斷」という表現は、明らかに前節での筆者の議論と矛盾抵触していると思われる。と言うのは、『太平記』のこの表現に従えば、大犯三箇条とは、三箇条共全て揃って純然たる守護の検断事項でなければならないはずだからである。そこで、筆者は、前節で述べたような成立の経緯を経て、遅くとも南北朝時代に入る頃までには成立していたと考えられる大犯三箇条、換言すれば、大番催促・犯過人三箇条と言う表現の単なる便宜上の略称としての意味しか持たない大犯三箇条の語は、南北朝時代に入った後、『太平記』が成立するに至るまでの間に、内容上の変化を被り、三箇条全てが純然たる守護大名の検断事項に切り替わる結果になって行ったのではないかと推測している。もし筆者のその推測が当たっているとすれば、『太平記』の作者は、三箇条が全部揃って当時の守護大名の検断事項に切り替わっていた同時代の新しい大犯三箇条を見て、それを鎌倉時代以来の旧来の大犯三箇条であると誤信し、『太平記』の中に「大犯三箇條ノ檢斷」と記述していたと言うことになるのではないかと思う。しかし、それでは、何故にそのような大犯三箇条の語の内容変化が生じたのであろうか。

筆者は、以前拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」⁽²¹⁾の中で、この大犯三箇条の内容変化の問題について詳論したことがあるので、詳細については、拙稿の記述によって頂きたいが、ここでごく簡単にその要点だけを繰り返し説明すると、よく知られて

いるように、室町幕府は、京都に開かれたので、足利将軍に従う畿内・近国などの有力な守護大名は、京都に定住して、幕府の要職に就き、所謂「在京」生活を常とするようになった。常時在京して生活を送る守護大名は、文字通りに「在京大名」と呼ばれるようになる。在京大名の語は、例えば、『後愚昧記』などの同時代資料の上に散見される。⁽²²⁾ 婆娑羅大名として有名な佐々木道誉は、在京大名の代表者の一人と言えよう。⁽²³⁾ 大犯三箇条の筆頭にある大番役は、遠く平安時代に始まり、鎌倉時代を通じて永らく続いて来て、ごく短命に終わった建武政権の時代⁽²⁴⁾ までは、確かに存続していたが、それが南北朝時代以後になると、内裏の守護及び京都の警固の業務を主に室町幕府の侍所及び在京大名が担当するようになったので、その代わりに、ここに至って、大番役が遂に廃れて行った。こうして、前代の鎌倉時代に合計三箇条だけに固定されていた守護の職権事項の中から大番催促の一項目が脱落し、消滅して行くことになったが、大番催促の一項目が消滅すると、前節で論じたような成立の経緯を持っていたと考えられる大犯三箇条の語は、その表示機能の重要部分を喪失することになって、同時代の守護大名の職権事項の範囲を全三箇条で明示すると言う肝心の役割を果たすことが最早全く不可能となり、同時代の守護大名の職権事項を表す便宜的な略称としては、最早到底存立し得なくなってしまうと考えられる。単なる便宜上の略称に過ぎないとは言え、一個の法令用語として成り立っていた大犯三箇条は、ここに存続の危機を迎えたのである。そこで、大番役が廃れた南北朝時代以後には、仮に大犯三箇条の語が辛くも消滅の憂き目を免れ、同時代の守護大名の職権事項の範囲を全三箇条で表す機能を担う一個独立の法令用語として辛うじて存続し得ることになったとしても、その場合、大犯三箇条と言う一個独立の法令用語の意味内容自体が何らかの変化を被ることは、避け難くなったと考えられる。そして、その内容の変化の様相については、南北朝時代に入って廃れた大番催促以外に残された謀叛、殺害人の二項目が何れも重大な犯罪行為の意味を持つ大犯の範疇に属していたと言う事情があり、全体の三分の二を占める優越性からして、大犯三箇条の語の中にある大犯と言う語の語義が三項目全てについて重大な犯罪行為と言う意味だけに落ち着いて行くことにならざるを得ず、その結果、大犯三箇条の語が『太平記』が記述するような全三箇条共に純然たる守護大名の検断事項だけを表す法令用語に変化を遂げるに至ったのではないかと推測されるのである。

大体このように想像される大犯三箇条の内容変化を考える上で、康永二年（1343年）十月二日に石塔義元が相馬親胤宛に発した全三箇条から成る「條々」は、『太平記』が記している純然たる守護大名の検断事項だけから成る新たな大犯三箇条の登場について示唆するところが少なくないように思われるので、前掲拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」の中でも引用したことがあるが、今ここに改めてその全文を引用紹介する。

條々

一 謀叛人事

一 殺害人事

一 夜討強盜山賊海賊事

右、於實犯露顯輩者、究明之、可被注進之、就交名、可處罪科之狀如件、

康永二年十月二日

左馬助（花押）

相馬出羽權守殿⁽²⁵⁾

前掲拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」では、筆者は、この文書の冒頭に掲げてある箇条書きの条々が南北朝時代に入って新たに成立した大犯三箇条そのものであったのではないかと推定した⁽²⁶⁾が、実のところは、この条々が大犯三箇条に他ならないと言う肝心の点については、一言も明言されてはいないのである。尤も、この条々の内容を見ると、全三箇条から成り、室町幕府の言う大犯三箇条の三項目の中から大番催促を除いた謀叛人の事件と殺害人の事件の二項目が明記されているから、室町幕府の言う大犯三箇条と共通する部分が大きく、これがこの時代に入って新たに成立した大犯三箇条であることは、先ず間違いないと言えそうである。しかし、万一この条々が新たに成立した大犯三箇条そのものではなかったとしても、室町幕府の言う大犯三箇条に内容的に極めて深い関連性を持つ全三箇条の規定であることは、動かし難いところであろう。第三条に置かれている「夜討強盜山賊海賊事」は、元々御成敗式目第三条では、室町幕府の言う大犯三箇条の付けたりに置かれていた事項と全く同一の内容を持っているから、この点から見ても、この条々は、室町幕府の言う大犯三箇条と非常に密接に関わっていると言えるが、仮にもしこの条々が三箇条共全て揃って純然たる守護大名の検断事項へと内容変化を遂げた後の新たな大犯三箇条に他ならなかったとすれば、前掲拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」で筆者が推測した通り、第三条の「夜討強盜山賊海賊事」は、南北朝時代に入り、大番催促の一項目が室町幕府の言う大犯三箇条の中から脱落して行くと共に、それに置き換わることになって、その結果、重大な犯罪行為と言う統一的な意味を持つ大犯の語の下に論理矛盾を来たさない新たな大犯三箇条が成立したと考えることができよう。⁽²⁷⁾しかし、もしそうだとすると、この条々の作成年代との前後関係から見て、小稿の冒頭第Ⅰ節に掲げた貞和二年十二月十三日の「同守護人非法條々」の第一条の冒頭に記されている大犯三箇条の語も、『太平記』に出ている大犯三箇条の語と同様に、やはり三箇条共全てが純然たる守護大名の検断事項に改まり、内容変化を遂げた後の新たな大犯三箇条を指していると言う可能性が高まって来る。そうなると、前節で筆者が成立の経緯を推定した大番催促・犯過人三箇条と言う表現の単なる便宜上の略称としての意味しか持たない大犯三箇条と言うものは、結局のところ、小稿の冒頭第Ⅰ節に掲げた建武五年後七月廿九日の「諸國守護人事」に出て来る「大犯三ヶ條」の僅か一例だけに該当し得るに過ぎないと言うことになってしまうのではあるまいか。

しかし、筆者としては、実は、この点についての懸念を余りと言うより殆んど持ってい

ないのである。小稿の冒頭第Ⅰ節で触れたように、残存資料の制約があるので、現在までに活字化されている資料に依拠する限りでは、鎌倉時代における大犯三箇条の成立の事実を確認し難いのは、確かに否定できないところではある。しかし、小稿で筆者が縷々述べ来たように、大番催促・犯過人三箇条と言う表現の単なる便宜上の略称としての意味しか持たない大犯三箇条の語が成立するための基本的な前提となる諸条件は、実は、既に御成敗式目が成立するよりも以前の鎌倉時代前期の相当早い段階で全て一通り出揃っていたのであり、この点に関しては、殆んど全く疑いを挟む余地が残されていないと言ってよいのである。その上、概して言えば、単なる便宜上の略称と言うものは、何れの時代においても、その便宜性とその必要性とに応じて容易に成立し得ると言う実用本位の性質を色濃く帯びていると考えられると言う点も、当然考慮に入れなければならないであろう。従って、筆者が推定した大番催促・犯過人三箇条と言う表現の単なる便宜上の略称としての意味しか持たない大犯三箇条の語が、仮に御成敗式目の制定以前の鎌倉時代前期に既に確固として成立を見ていたとしても、そのことは、何ら不思議ではないと言い得るし、そのことから、別段何らの差し支えも生じては来ないと言ってよいのである。より正確を期して言うと、実のところは、むしろ、大番催促・犯過人三箇条と言う表現の単なる便宜上の略称としての意味しか持たない大犯三箇条と言う一個独立の法令用語は、鎌倉時代においてだけしか成立し得ない法令用語であったと言っても差し支えない程なのである。何故かと言えば、本節で言及したように、大番催促と言う守護の職権事項が実質的に意味を持ち得たのは、精々のところ、鎌倉時代一杯までのことに過ぎなかったからであり、その後は、縦令どれ程時代を下降して行ったとしても、建武政権の時代を下限とするに止まっていたからである。

Ⅵ 終わりに

小稿では、①例えば、初期の室町幕府が自ら発した法令の中で大犯三箇条の語を用いて、鎌倉幕府が定めた御成敗式目第三条に規定されていた合計三項目から成る鎌倉時代の守護の職権事項全三箇条を言い表そうとした場合に見られたように、大犯と言う一個独立の熟語が単独ではなく、大犯三箇条として熟した一個独立の法令用語の中に出て来る場合に限って見れば、そこに出て来る大犯と言う語は、大犯の語から通常連想されるような重大な犯罪行為の意味合いを全く持っていなかったと考えられると言うこと、及び、②その場合の大犯三箇条とは、単に大番催促・犯過人の二項目から成る守護の職権事項合計全三箇条を表す大番催促・犯過人三箇条と言う聊か長きに過ぎる表現を便宜上短縮し、大番催促・犯過人の各語の冒頭にある大の字と犯の字を略号として、それらの略号を併記して連ねただけの圧縮された便宜上の略称に過ぎなかったと考えられること、の二点を指摘した。

筆者の説く圧縮された便宜上の略称に過ぎない大犯三箇条が何時頃成立したのかと言う肝心の問題点については、現時点では、残存資料の制約が大きく、確言することができないが、小稿でのごく簡単な考察の結果、少なくとも小稿の冒頭第Ⅰ節で筆者が仮説として一言触れておいた大犯三箇条の〈南北朝時代成立説〉は、およそ成り立ち得ないと言うことがほぼ判明したのではないかと思う。筆者の説く圧縮された便宜上の略称に過ぎない大犯三箇条は、南北朝時代に成立したのではなく、逆に南北朝時代には、その意味と表示機能を失い、消滅の憂き目を見るに至ったと推測される。そして、それに取って代わって、前掲の康永二年十月二日の条々とか、或いは、『太平記』で言及されているような、三箇条共一揃いの純然たる守護大名の検断事項としての意味を持つ大犯三箇条が新たに登場して来たと考えられる。従って、南北朝時代に至って、三箇条共一揃いの純然たる守護大名の検断事項として新たに成立した大犯三箇条の中に出て来る大犯の語は、最早大の字と犯の字の二つの略号を連記しただけの略称などではあり得なかったのであり、疑いもなく、守護大名による検断の対象となるべき重大な犯罪行為の意味だけしか持ち合わせていなかったとすることができるのである。

そこで、筆者が圧縮された便宜上の略称に過ぎないと見ている鎌倉時代の守護の職権事項合計三箇条を表す大犯三箇条の方を仮に「鎌倉型」の大犯三箇条と名付け、これに対して、南北朝時代に内容の変化を遂げて、三箇条全てが重大な犯罪行為に関する守護大名の検断事項の規定だけに矛盾なく統一されたと考えられる大犯三箇条の方を仮に「南北朝型」の大犯三箇条と名付けて、両者を区別することが一応可能になると思われる。但し、拙稿「南北朝合一に伴う大犯三箇条の変化について」の中で言及したように、大犯三箇条の内容は、南北朝時代に完全に固定されるに至ったと言う訳ではなく、南北朝時代を通じて更なる変化を遂げて行ったと想像される⁽²⁸⁾から、次の室町時代に至って新たに成立したと考えられる更に一段と新しい型の大犯三箇条を「室町型」の大犯三箇条と名付けて呼ぶことにすれば、室町型は、南北朝型とはまた別個独立の大犯三箇条として捉えなければならなくなり、これでは、聊か繁縷を来たしてしまうことは否めない。小稿の趣旨に照らして、ここでは、室町型は一先ず攔き、鎌倉型と南北朝型の二種類の大犯三箇条だけを取り上げることにして、今試みに両者を対比して見れば、鎌倉型も、南北朝型も、呼称の上では、どちらも単に大犯三箇条と呼ばれているだけであつたから、外観上は、全く見分けが付かなかったと言ってよいと思う。その上、内容的にも、全三箇条の内の謀叛、殺害人の二箇条までは、どちらの型も、共通して持っていたから、両者間に大差がなかったと言うのは、確かにその通りには相違ない。しかし、小稿で見て来たように、鎌倉型と南北朝型の二つの大犯三箇条は、成立の時期や成立の経緯や有効期間を全く異にしていたと考えられるから、鎌倉型を以て南北朝型を完全に説明付けることは、およそ不可能であるし、その反対に、南北朝型を以て鎌倉型を完全に説明付けることも、やはりおよそ不可能なこ

とと言わなければならないのである。この事実を指摘して結語に代え、一先ず小稿を締め括ることとしたい。

注

- (1) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第二巻室町幕府法』(岩波書店)、1957・6・29、12頁。引用に当たっては、字体を変更し、返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (2) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第二巻室町幕府法』(岩波書店)、1957・6・29、23頁。引用に当たっては、割注を【 】内に入れ、字体を変更し、返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (3) 後藤丹治・岡見正雄校注『太平記三〔日本古典文学大系36〕』(岩波書店)、1962・10・5、252頁。引用に当たっては、字体を変更し、振り仮名・返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (4) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第一巻鎌倉幕府法』(岩波書店)、1955・10・8、4・5頁。引用に当たっては、割注を【 】内に入れ、文字列・字体を変更し、文中の点・傍点を省略した。
- (5) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第一巻鎌倉幕府法』(岩波書店)、1955・10・8、76・77頁、追加法第三号。引用に当たっては、文字列・字体を変更し、返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (6) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第一巻鎌倉幕府法』(岩波書店)、1955・10・8、335・336頁、参考資料第二号。引用に当たっては、割注を【 】内に入れ、文字列・字体を変更し、字の枠・返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (7) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第二十八巻』(東京堂出版)、1985・4・15、106頁、第二一三二四号「紀伊神野莊公文【平義信】起請文」。引用に当たっては、割注を【 】内に入れ、字体を変更した。
- (8) 黒板勝美・国史大系編修会編『吾妻鏡第二』(吉川弘文館)、1986・7・20、563頁、正治元年十二月廿九日条。引用に当たっては、文字列・字体を変更し、傍点・返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (9) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第一巻鎌倉幕府法』(岩波書店)、1955・10・8、61頁、追加法第一号～第三号。引用に当たっては、文字列・字体を変更し、文中の点・傍点・返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (10) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第五巻』(東京堂出版)、1973・9・25、104頁、第二九五八号「關東下知狀案」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (11) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第五巻』(東京堂出版)、1973・9・25、219頁、第三一四五号「關東下知狀」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (12) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第六巻』(東京堂出版)、1974・4・10、91頁、第三七五四号「但馬守護昌明請文案」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (13) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第六巻』(東京堂出版)、1974・4・10、126頁、第三八三〇号「關東下知狀」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (14) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第六巻』(東京堂出版)、1974・4・10、152頁、第三八八七号「關東御教書案」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (15) 黒板勝美・国史大系編修会編『吾妻鏡第三』(吉川弘文館)、1985・8・10、261頁、

仁治元年六月十一日条。引用に当たっては、割注を【 】内に入れ、字体を変更し、傍点・返り点を省略し、注記の類を全て省略した。

- (16) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第三卷』（東京堂出版）、1972・8・30、391 頁、第一八二〇号「關東御教書案」。引用に当たっては、字体を変更し、注記の類を全て省略した。
- (17) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第五卷』（東京堂出版）、1973・9・25、179 頁、第三〇七九号「播磨守護所藤原某安堵狀寫」。引用に当たっては、文字列・字体を変更し、本文の傍の追加記載部分を省略し、注記の類を全て省略した。
- (18) 注（11）所引の資料を参照。
- (19) 竹内理三編『鎌倉遺文古文書編第五卷』（東京堂出版）、1973・9・25、367・368 頁、第三四〇六号「北條重時書下」。引用に当たっては、字体を変更し、押紙の部分を省略し、注記の類を全て省略した。
- (20) 注（3）所引の資料を参照。
- (21) 拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」（『共栄学園短期大学研究紀要第 19 号』所収）、2003、20・21 頁。
- (22) 小稿では、引用を省略するので、時日の指摘だけに止めるが、例えば、『後愚昧記』康暦元年閏四月十四日条などを参照。
- (23) 佐々木道誉については、例えば、林屋辰三郎『佐々木道誉—南北朝の内乱とくばさらの美』（平凡社）、1995・2・15 を参照。
- (24) 小稿では、引用を省略するが、例えば、『建武年間記』には、建武二年三月一日に定められた「大番條々」の記載が見られる。
- (25) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集第二卷室町幕府法』（岩波書店）、1957・6・29、163 頁、参考資料第二七号～第二九号。引用に当たっては、字体を変更し、返り点を省略し、注記の類を全て省略した。
- (26) 拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」（『共栄学園短期大学研究紀要第 19 号』所収）、2003、20～24 頁。
- (27) 拙稿「南北朝期に於ける悪党の法的位置付け」（『共栄学園短期大学研究紀要第 19 号』所収）、2003、23 頁。
- (28) 拙稿「南北朝合一に伴う大犯三箇条の変化について」（『共栄学園短期大学研究紀要第 21 号』所収）、2005 を参照。